芭蕉元禄事業　奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十七年七月度 入選句（投稿総数千八百一句・一般投句数七百三十一句）

選者　名和永山

特選

江戸風鈴我家の風にすぐ馴染む　養老郡養老町　田中紫香

「風鈴」は、夏に軒下などに吊り下げられて用いられる小型の鐘鈴である。鉄や銅、陶器など様々な材質で作られ、その音色はひとつ一つ違っている。冷房のなかった時代に日本のむしむしとした湿気の多い暑い夏を、この風鈴の音で涼しい風情を感じてきたのである。

作者は、よく見られる鉄製の風鈴ではなく、江戸風鈴を吊し、涼しい音を楽しもうと軒下に吊したのであろう。江戸風鈴とは、江戸時代から受け継がれてきた「ガラス製」風鈴であるが、通常の鉄製の風鈴とは異なり、どんな音だろうか？風にすぐ反応してくれるだろうか？心配したのであろう。句の中の「我家の風にすぐ馴染む」から、ホッとした作者の気持ちが読み取れる。また、「江戸風鈴」を用いたことで、時代を越え、その土地の風土を越えて、風が馴染んだことの広がりを感じることができる。

亡き夫に尋ねたきこと蛍の夜　大垣市　伊藤明美

「蛍の光」＝「乱舞」は幻想的で、懐かしの時を与えてくれます。今は亡き旦那様にまだまだ尋ねたいことがあった。作者の想いは、昔にタイムスリップをしていく。

今は、なかなか「蛍」を身近では見ることができないが、昭和の四十年代には、私の住む傍の小川でも見ることができた。蛍は、そんな昔を偲ばせてくれる。この句の「亡き夫に尋ねたきこと」と「蛍」の取り合わせで、しっかりと「季語」が活きているのである。

サングラス隠しきれない幼な顔　大垣市　新藤慈子

サングラスは「夏」の俳句には多い。サングラスを掛けると、今までの自分とは変わった気分になる。あるいは、どこか自分を隠したいそんな気分でサングラスを掛ける。本来は、まぶしさを遮るものであるが、俳句では「変身願望」を満たしてくれるような句が多い。「サングラスしても己が身隠せざる」という句もあった。

私はあえて、「幼な顔」が隠せなかったという、サングラスとの不調和なところに惹かれた。かわいいではないか。そして、幼な顔にサングラスを掛けた作者の顔が連想されるではないか。具体的な「幼な顔」が醸し出す「面白さ」わき出る句である。

秀逸

病む地球救い給へや星祭　愛知県名古屋市　小松とみゑ

席一つ占領したる夏帽子　大垣市　矢橋郁子

一陣の風にゆらぎて蚊遣り香　大垣市　岡田あや子

美濃に住み災害無きや柿の花　大垣市　浅野亨

どくだみや嘘偽りの無い世界　大垣市　吉田てるみ

手帳もち俳句詠む子の夏ぼうし　養老郡養老町　高木美保

竹落葉バトンを確と受け渡す　大垣市　谷彩虹

羅や風遊ばせて四季の路　大垣市　新町恵子

かな文字を綴るがごとく蛍の火　岐阜市　石崎宗敏

蝿を追ふこともかなはず泣く赤児　岐阜市　堀江美州

入選

山に住み人みなやさし山法師　大垣市　草野　恵子

掌の中へ子蜘蛛をゆるく握りけり　大垣市　佐藤　すみ子

禅庭しづかあぢさゐの濡れ咲きぬ　大垣市　坪井　克枝

尾をゆらし色をふりまく金魚かな　大垣市　伊藤　琴美

三伏や昭和の匂ふ資料館　大垣市　森川　きよ子

西瓜の花恋の成就は気儘なり　大垣市　大橋　正敏

あるわあるわ古刹の庭に蟻地獄　大垣市　棚橋　みさを

一病を抱えて生きる麦の秋　大垣市　安田　むつこ

円空のトーテムポール雲の峰　大阪府柏原市　辻井　義伸

風の道確め吊す軒風鈴　不破郡垂井町　富田　実郎

入選

食事することも忘れて蝿叩く　大垣市　傍島　豊子

ふる里の蝉の声聞く夕べかな　大垣市　清水　たず子

箸すすむ辛子程よき胡瓜漬け　大垣市　棚橋　昭子

夕べには音なく散りて沙羅の花　大垣市　日比野　友子

木偶の坊妻を頼りの衣更　不破郡垂井町　桐山　實

本陣の欄間の透かし彫り涼し　不破郡垂井町　小畑　美智子

鮎釣りの等間隔に根尾渓流　不破郡垂井町　江崎　真一

押入れも風を通して梅雨晴間　大垣市　高石　政明

酒蔵の軒掠め来る夏燕　神奈川県横浜市　龍野　ひろし

警笛を鳴らされてゐる立葵　京都府京都市　石田　江州

選者吟

みちのくの蝉たくましく響くこゑ　永山